

第5章 種梅記碑の被災と復旧

第1節 種梅記碑とは

種梅記碑は特別史跡旧弘道館の八卦堂の南約 15m に位置する。

第九代水戸藩主の斉昭は、天下に魁^{さきが}けて咲く梅を愛し、また、梅の実^{さき}は梅干しとして軍事の際の非常食として役立つため、弘道館や偕楽園をはじめ、近郊や士民の家にも梅の木を植えさせた。

種梅記碑は斉昭自撰の名文「種梅記」が自筆の隸書で刻まれており、斉昭の思いが込められている。種梅記碑の原文は次のとおりである。

種梅記

予自少愛梅庭植数十株天保癸巳始就国國中梅樹最少南上之後每歳手自採梅実以輪於国使司園吏種之偕楽園及近郊隙地今茲庚子再就国所種者鬱然成林開華結実適会弘道館新成乃植数千株於其側又令國中士民每家各植数株夫某之為物華則冒雪先春為風騷之友実則含酸止渴為軍旅之用嗚呼有備者无患数歳之後文葩布国軍儲亦可充積也孟子不云乎七年之病求三年之艾可不戒哉聊記以示後人云
天保十一年歳次庚子冬十月 景山撰文并書及篆額

読み下しを以下に示す。

種梅記

予^{われ}少より梅を愛し庭に数十株を植う。天保癸巳^{みづのとみ}、始めて国に就く。國中梅樹最も少なし。南上^この後、毎歳^{まいとし}手自ら梅実^{みづか}を採りて、以て国に輪^{もつ}、司園^{いたし}の吏^{しえん}をして之^{これ}を偕楽園及び近郷^{げきち}の隙地^うに種えしむ。今茲^{としかのえね}庚子再び国に就く。種^ううる所の者、うつ然として林をなし、華^{はな}を開き実^{たま}を結ぶ。適弘道館の新たに成るに会う。すなわち数千株をその側に植え、又國中の士民をして家毎に各々数株を植えしむ。夫れ梅のものたるや、華^{はな}は則^{すなわち}雪^{ゆき}を冒し春^{はる}に先だちで風騷^{ふうそう}の友となり、実^みは則ち酸^{あじ}を含み渴^{かつ}を止めて軍旅^{いくさ}の用となる。ああ備えあるものは患^{うれい}なし。数歳^{あま}の後、分葩^{ぶんぱ}国^{こく}に布^しき、軍儲^{ぐんちよ}もまた充積^{じゅうせき}すべきなり。孟子云わずや、七年の病に三年の艾^{あひ}を求むと。戒^{いまし}めざるべけんや。いささか記して以て後人^{こうじん}に示すという。
天保十一年歳次庚子に次の冬十月 景山撰文並びに書及び篆額

第2節 東日本大震災による被災状況

種梅記碑は国の所有、文部科学省の所管であり、覆屋は昭和28年に茨城県が設置し所有している。

東日本大震災では覆屋に損傷はなかったが、碑身が大きく後ろ側に傾き、茨城県が応急措置として支え棒を設置していた(図126・127)。

第3節 工事概要

弘道館記碑の復旧の設計と合わせて設計を行い、工事概要は次の通りである(図139・142～143)。

工事期間 平成25年3月10日～28日

請負業者 株式会社 ゴエトス

請負金額 577,500円

第4節 復旧の概要

1 クリーニング

水洗いでは、高圧水(25kg/cm²程度)の噴射で、碑身表面の汚れ・地衣類等を除去した(図128)。次に、家庭用弱アルカリ洗剤を用いてブラッシングを行い、特に刻字内部を綿密に行った(図129)。

2 搬出

碑身の荷重が覆屋に掛からないように、鋼製単管パイプを用いて吊り上げ用支保材を仮設した。それを用いて碑身を吊り上げ、ホゾを台石ホゾ穴から後ろへ引き抜き、碑文面を上に向けて、コロ



図126 種梅記碑の被災状況(北から)



図127 種梅記碑の被災状況(西から)



図128 種梅記碑のクリーニング状況(北西から)



図129 クリーニング後の種梅記碑(北から)



図130 種梅記碑の引出状況(西から)



図 131 種梅記碑の引出状況（西から）



図 132 種梅記碑のホゾ穴内部（西から）



図 133 種梅記碑背後の焼土層（西から）



図 134 礎石下の埋設石



図 135 種梅記碑のホゾ部の計測



図 136 種梅記碑のホゾ部の形状



図 137 種梅記碑のホゾ部の計測



図 138 碑身と台石接合部への漆喰の充填状況

を使い、木柵外に引き出した（図 130～131）。

3 台石の状況

台石は三石から構成され、中央のものが大きく、両脇の石には碑身の荷重はかかっていない（図 132）。向かって左側の石の左側がわずかに高くなっており、震災の影響かと懸念された。このため、台石を掘り出し、場合によってはボルトなどを用いて一体化することも考えていたが、近接の樹根の影響と判断した。一方、中央の台石上面が僅かに後ろ側に傾斜していると判断したため、台石を水平にすべく台石背面を掘削した。5cm 程の表土の下には 7～8cm の焼土層があり、その下は良く締まった、小石・礫混じりの褐色土であった（図 133）。礎石据え付け掘り方の埋め戻し土であろう。部分的にはあるが、台石は 42cm の厚みがあり、その下に埋設した板石が据えられていることが確認でき（図 134・140）、上面の傾斜は地震によるものではないとの確信を得られたので、それ以上の掘削と台石の据え直しは行わなかった。

4 碑身と台石の接合部

碑身の底面は背面側に向かって 3cm 程上がっており（図 135・136）、碑身を台石上に立てると、碑身が後方へ傾く構造になっていた。ダボには漆喰が使われていた痕跡があったため、構造的な不安定さは漆喰の充填によって補っていたものと思われる。このため修復では、碑身建立後に小石を挟み、ホゾ穴に漆喰を十分に叩きながら詰め込んだ（図 137・138・141）。漆喰の配合は重量比で、消石灰：珪砂 5 号：珪砂 6 号：糊（アクリルエマルジョン）＝ 3：3：2：2、である。

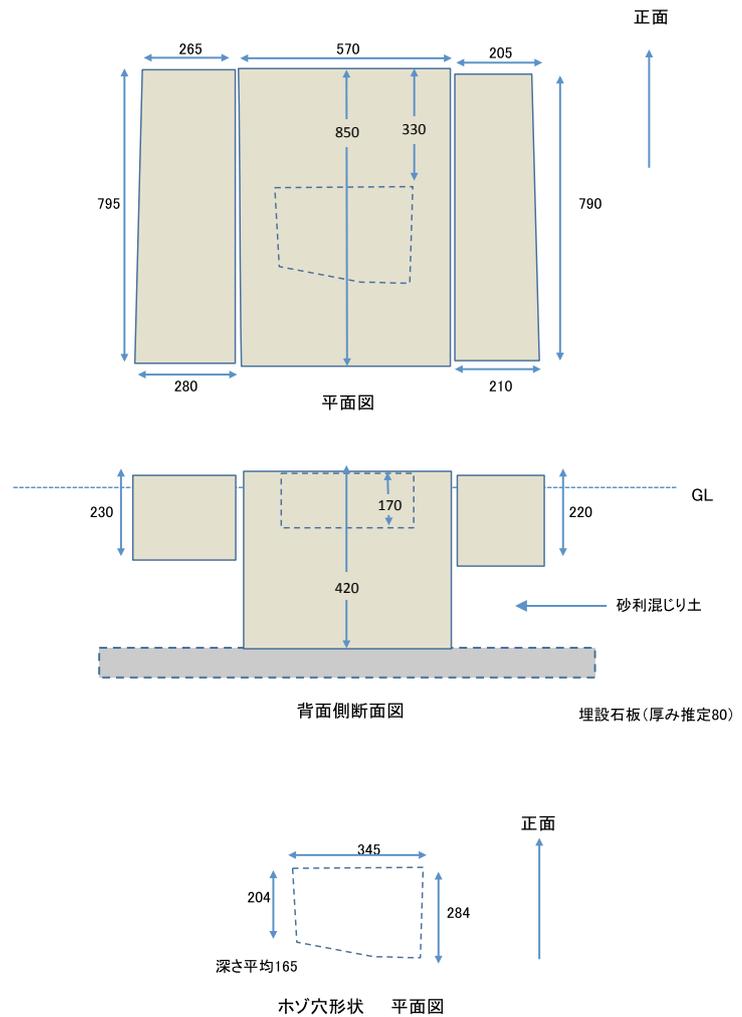


図 140 種梅記碑礎石

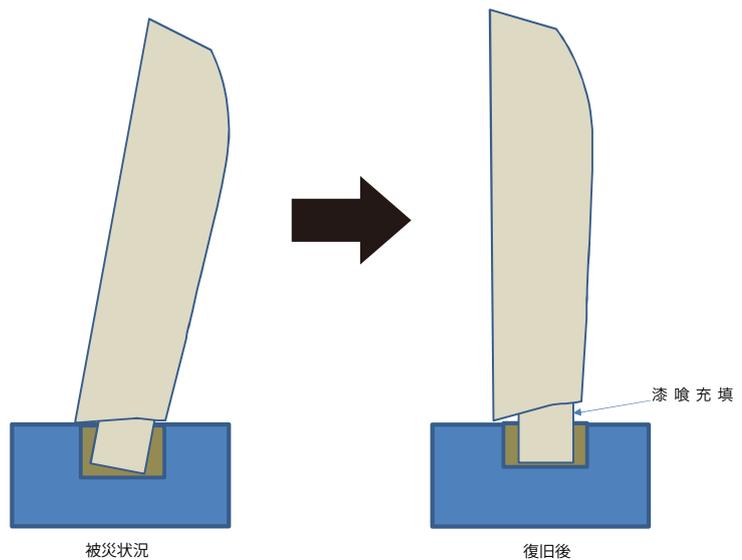
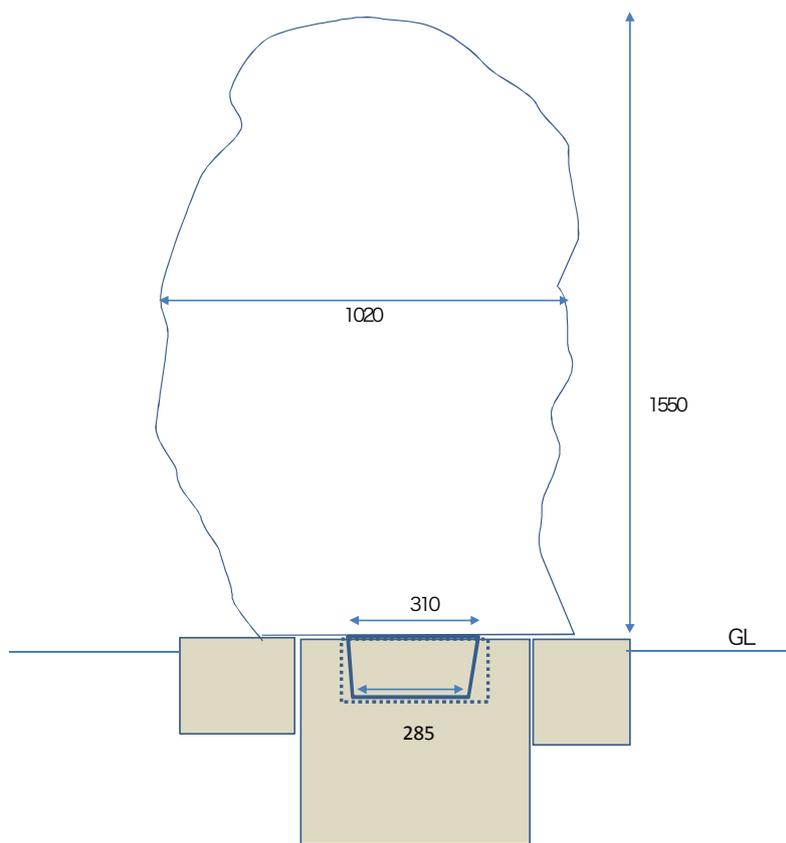


図 141 種梅記碑の復旧状況



中央礎石

図 142 種梅記碑の修復完成模式図



図 143 修復後の種梅記碑（北から）